

エッセイ

産婦人科医が“腔”を使ってはならない

益田赤十字病院 第一産婦人科部長
水田 正能

先日、京都で行われた産科婦人科学会総会に参加した。京都は古代・中世より政治・経済・文化の中心であり、医学においても多くの医師が活躍したところである。産婦人科医にとっても重要な意味をもつ場所で、賀川流産科の鼻祖である賀川玄悦が、下京区下松屋町通松原下った一貫町において、遷延横位の産婦に対して初めて産科手術を行った。その後「大抵五月之後、腹中胎大如瓜、必背面而倒首、其頂当横骨上際而居(大抵五月の後、腹中の胎の大きさ瓜の如し。必ず背面けて、首を倒にす。その頂、横骨の上際に当りて居す)」（荒井保男著、『医の名言』中央公論社）と書き、世界で初めて、頭位が正常胎位であると著書『産論』に表した。玄悦の墓は下京区中堂寺西寺町の玉樹寺にある。

その京都で行われた学会で、ポスター発表を中心に拝見した。ポスター発表は詳細にみる事ができるので、学会ではとくに時間をかけることにしているが、ふと思いついて、漢字の“腔”と“腔”のいずれをポスター発表の中で使用しているか数えてみた。日本人の発表全643発表の内、ポスターに“腔”あるいは“腔”の漢字を見つけた発表が40編。その中で“腔”が24編、“腔”が16編だった。

いずれの字が正しいか。正解は“腔”である。医史学の泰斗で東京大学名誉教授であられた故小川鼎三博士は、「日本の医学用語としては【腔】ではなくて【腔】が正式である。」と、『医学用語の起り』（東京書籍、1990年）に書いておられる。

“腔”という漢字は、文政9年(1826年)、『重訂解体新書』の中で、大槻玄沢が初めて使用している。『重訂解体新書』は、『解体新書』の原典であるクルムスの『解剖圖譜』を翻訳、重訂したものである。その中で大槻玄沢は、“腔”を女性生殖器に用いた理由として、「腔、法技納〔羅〕、悉劫乙牒、〔蘭〕」とあり、さらに「按ズルニシケイデハ室ナリ。則チ男茎容受ノ室ナリ、且ツ胎産及ビ月経通利ノ道ナリ、イマ新ニ字ヲ製シテ示シテシカ云ウ。室ノ辺傍肉ニ从ウ、音ヲ叱トナス、則チ会意ナリ。中略、肉生ズルナリノ腔ニハ非ズ」と書いている。これは、“腔”は以前より中国に存在していた漢字で、『玉篇』に「腔チツ、音扶、肉生也」とある。大槻玄沢は、中国製漢字の「肉が生ずる」という意味の“腔”の存在は知りつつも、臓器の特徴を著すために、「月(にくづき)部」に「室」を会意した漢字“腔”を使用したのである。大槻玄沢の記載は、小生の出身地である岡山県津山市にある洋学資料館で『重訂解体新書』を拝見させていただき、確認した。

どうして“腔”が誤用されているのか。一般に、“腔”は“腔”の略字であり、“腔”の方が古い字体で正式だと誤解されているようである。昭和22年初版の小川政修氏の『西洋醫學史』で探してみると、「妊娠診断、受胎、陣痛促進(坐薬)、乳分泌増加(膏薬貼用)、通経(煎劑の腔内注入)」と、「醫學」「斷」「經」などの旧字体の中でも、“腔”が正確に使用されている。さらに断定的な証拠として、大槻文彦氏は『大言海』に、“腔”と“腔”は異義の字であると書いているが、「腔八篇海「音室、肉生也」ト。今八腔ト同シク用ル」と続く。この『篇海』は、前出の『玉篇』より後代の著であるので、強いて言えば「腔」の方が旧字体なのである。

また、1851年の中国で出版された『全体新論』には、女性生殖器の記載では“陰道”と書き表されているという。ところが、1915年中華民国発行の『辞源』に、「腔、女子陰道、上通子宮、一名生殖口」とある。この点から、中国が“腔”ではないが、同じ使い方をする後世の字である

“膾”を使うのは、『重訂解体新書』の影響であろうと小川鼎三博士は書いている。現在の多くの産婦人科医の、漢字は中国が本場という先入観が、“膾”を本家扱いして誤用しているのである。たしかに、現在のパソコンで“ちつ”と入力すると、通常には“膾”の字がまず選択され、“膾”は手書き文字入力などで探さなければならない。しかしながら、正しいのは“膾”であるから、全ての産婦人科の教科書に“膾”の字はない。

平成18年度より、鳥取大学医学部臨床准教授の職責をいただき、医学部学生に講義を行うこととなった。内容は産科を中心にした医学の歴史についてである。その場でも、“膾”の字についても強調しておいた。今回、ポスター発表された先生方の中には、大学病院に属している先生方も多い。とすれば、医学教育の拠点であるべき場所で、医学の歴史的視点からの知識が不十分であるというのは、いかがなものであろうか。

